

# 飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

令和2年9月25日現在

## 今月の重点活動

### ■ほうれんそう 若菜会スマート農業現地研修会【スマート農業加速化実証事業】

飛騨野菜出荷組合ほうれんそう部会の次世代の担い手である若手生産者で構成される若菜会は、国のスマート農業加速化実証事業の中心を担っている。その若菜会が主体となり、8月24日、高山市下林町にてスマート農業現地研修会を開催し、関係者含め約50名が参加した。

当日は、高山市の担当者やスマート農業技術の実証を行っている若菜会役員から、事業の概要や進捗状況について説明がされた。参加者はラジコン草刈機や遮光カーテンの自動制御、アシストスーツなどを視察し、ほうれんそう経営へのスマート農業技術の導入に興味を示していた。

農業普及課は、事業の進行管理役として実証調査に協力し、スマート農業技術のほうれんそう経営への導入可能性について検証していく。



【ラジコン草刈機を  
視察する生産者】

## 多様な担い手づくり

### ■指導農業士 新たな指導農業士に期待！！～農業士認定証交付式～

例年5月に開催される岐阜県指導農業士連絡協議会の総会等が新型コロナウイルスの影響で中止となったため、指導農業士会飛騨支部では9月10日に認定証交付式を開催し、新たに3名（野菜2名、果樹1名）が認定された。

飛騨農林事務所長からは、担い手育成を中心として飛騨地域の農業を牽引している指導農業士の役割に感謝し、今後とも飛騨地域の産地維持に尽力頂きたいと激励の言葉が送られた。青豆支部長は、農大生等の短期及び長期研修生の受入れによる後継者育成や、品目の異なる経営者との交流を通じて知識や技術向上に励んで欲しい等の挨拶をされた。



【所長より認定証を交付】

### ■飼料イネ WCS用稲品種比較及び調製・給与技術研修会が開催

WCS（ホール・クロップ・サイレージ）用稲の品種特性比較試験から各品種の早晩性（早生・晩生の違い）、子実着生比率（籾の量や付き方）、飼料成分等の特性について理解し、飛騨地域に適したWCS用稲品種選定の参考に資するため、9月4日にWCS用稲の研修会が開催された。

研修会は農業経営課の主催で中山間農業研究所を会場に開催され、WCS用稲生産者や畜産農家ら24名が参加した。農業経営課が給与技術、農業普及課が栽培技術を担当して講演し、中山間農業研究所からは品種比較試験の実施状況が報告された。当日はあいにくの天気で品種比較試験ほ場の視察は十分にできなかったが、参加者からは活発に質問があり、WCS用稲生産者と畜産農家、双方の理解を深めることができた。

農業普及課では今後もWCS用稲の栽培指導を中心に耕畜連携の推進に向けて支援を継続していく。



【栽培管理技術の講演】

## 売れるブランドづくり

### ■宿儺かぼちゃ 第16回宿儺かぼちゃ品評会

飛騨高山のブランド野菜である宿儺かぼちゃが収穫の時期を迎えた。今年は災害級の豪雨の後、7月末まで雨が続き土壌の排水が進まず、宿儺かぼちゃの生産には大変厳しい条件であったが、宿儺かぼちゃ研究会員の努力のもと無事収穫を迎えた宿儺かぼちゃが出品された。

第16回を数える今年の品評会は新型コロナウイルス対策として、関係者のみでの開催となったが、一般部門35点、大物部門4点、ユニーク部門12点の出品があり、行政や市場、JAひだ職員が審査員となり厳正な審査を行った。

ユニーク部門では将棋の藤井新棋聖を祝った「文字入りかぼちゃ」が登場し、テレビ、新聞等のメディアで宿儺かぼちゃの新たな一面を取り上げてもらうなど、生産者の熱意を広く伝える良い機会となった。

農業普及課では、今後も高品質な宿儺かぼちゃ生産のための基本技術の発信や、流通促進の支援を行い、産地を盛り上げていく。



【良品揃いで審査は難航】



【文字の浮かび上がるかぼちゃ】

### ■白川村 米食味コンクール出品用の稲を選定

白川村美味しい米づくり研究会では、9月15日に飛騨地域の米食味コンクール「飛騨の美味しいお米・食味コンクール（米コンひだ）」に出品する候補を選定した。研究会では、今年で6回目を迎え10月29日に開催される「米コンひだ」での入賞を目指している。

当日は、特別指導者に委嘱した鍵谷中山間農業研究所長を招へいし、会員の水田を巡回して出品する稲を見定めた。

農業普及課では、美味しい米がとれる稲の特徴や食味を向上させるための収穫・乾燥調製技術について説明した。今後も研究会の活動を支援し、白川郷産米のさらなる食味向上と、ブランド確立のための取り組みを推進していく。



【生産者とともに出品候補を吟味】

### ■リンゴ 「袋リンゴ」目揃え会を開催

9月9日に、高山市果実組合主催で、「袋リンゴ」目揃え会が行われ、組合員11名、関係者3名が出席した。

当日は、全農の担当者から他産地の生産状況等について、農業普及課から病害虫の発生状況や収穫の注意点等について情報提供した。その後、各生産者が出荷基準の確認や生育状況について意見交換した。

今年は、6～7月の長雨で降水量が多く、例年より日照量は少なく、気温は少し高めで推移している。9月中旬から出荷が始まっている「つがる」は、気温が高いため着色が進まず収穫適期の判断が難しくなっている。

農業普及課では、今後も関係機関と連携し、リンゴの安定生産に向けた支援を実施していく。



【出荷基準の確認を行う生産者と全農職員】



## ■夏秋トマト 飛驒トマト中間目揃え会実施

飛驒野菜出荷組合トマト部会では、後半の出荷に入りD品（下位等級品：期間指定で出荷可能）の出荷も開始することから、出荷規格の目合わせをしっかりと行うため、各地区で中間目揃え会が開催された。

8月21日には、各地区に先立ち、高山南野菜出荷組合トマト部会で目揃え会が開催され、着色や規格の確認が行われた。

農業普及課では灰色かび病の防除徹底や下葉かき等による通気性の確保について研修を行った。

今年度は7月の長雨の影響を受けて、前半の収量が前年に比べてやや伸び悩んだ。今後、高単価が期待される秋季に少しでも多く出荷できるよう支援を行っていく。



【情報提供を受ける生産者】

## ■夏秋トマト 「飛驒トマト部会統一圃場審査」開催

飛驒野菜出荷組合トマト部会では、近年の課題である秋期の安定出荷の推進を目指し、管理の優れた圃場について、巡回し評価する「飛驒トマト部会統一圃場審査」を毎年実施している。

9月18日、管内7部会（下呂地域と飛驒地域）から推薦された7か所のほ場において審査が行われた。生育、着果、病害虫の発生状況、果実の品質、ほ場内の衛生管理等の観点で審査した。

農業普及課は、当日の審査員として参加し、ほ場ごとの評価を行った。どのほ場も栽培管理が行き届いており、秋期に十分な収量が見込まれるなど、非常にレベルが高く優劣のつけがたい審査となった。

今後は、出荷実績を踏まえた審査が行われ、12月の飛驒トマト部会全体反省会で表彰が行われる。



【優良圃場を審査する審査員達】

## ■飛驒ねぎ 生産者ほ場巡回の開催

飛驒一本太ねぎは「飛驒・美濃伝統野菜」にも名を連ねる歴史ある作物であり、霜に当たると粘りや甘みが増すのが特徴である。丹生川飛驒ねぎ研究会とは、品質の良いねぎ生産のため日夜栽培技術の研究に励んでいる。

8月25日、同研究会会員のほ場を回る現地ほ場巡回が行われ、出席した研究会員8名のほ場を巡回し、生育状況や肥培管理について情報交換が行われた。農業普及課からは栽培マニュアルに基づき、今後の管理や病害虫防除のポイントについて説明した。

11月の収穫に向けて今後も定期的に支援を行う。



【ほ場で情報交換】

## ■ほうれんそう **ハウレンソウケナガコナダニ防除実証圃調査**

飛騨地域のほうれんそう栽培においては、ハウレンソウケナガコナダニの加害による商品価値の低下が問題になっている。

中山間農業研究所の研究成果として、コナダニ対策を目的とした農薬「キルパー」の散布混和による防除技術が発表されており、それを受け今年、吉城地区の生産者が実証ほを設置した。農業普及課では、その効果を検証するために実証ほの調査をしており、キルパーの散布混和以降、1週間おきに土壌中のコナダニ頭数の調査を行うとともに、収穫時のほうれんそうの被害状況を調査している。

実証ほを設置した生産者は、例年コナダニ被害に悩まされており、被害が酷いときはハウス丸ごと廃棄するほどであったが、今回調査した実証ほではコナダニ被害がほとんどなく、期待する効果が得られた。

農業普及課では、品質の良いほうれんそう出荷を継続して行うため、様々な調査を実施して産地に情報提供をしていく。



【ハウレンソウケナガ  
コナダニ被害を確認】